

狩野川台風50年目の検証

国土交通省 沼津河川国道事務所 時田和廣、○程谷浩成
アジア航測株式会社 臼杵伸浩

1. はじめに

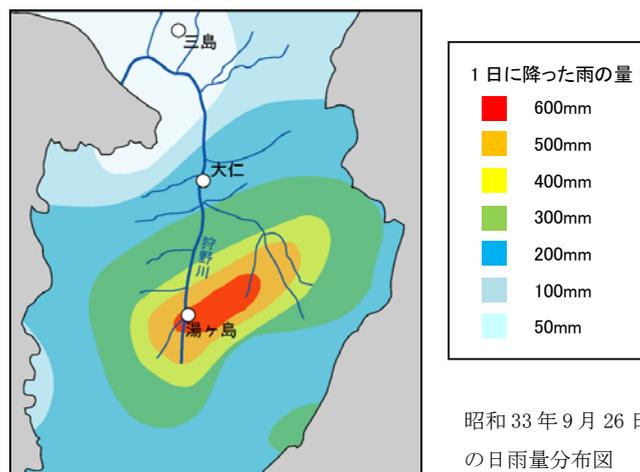
昭和33年9月26日、伊豆半島を襲った台風は狩野川流域だけで死者行方不明853名の甚大な被害を残した。気象庁は後にこの台風を「狩野川台風」と命名、これ以降、特に被害の大きな台風に地名を付けるようになった。狩野川上流域の天城山系では一週間前からの降雨と台風による集中豪雨により約1,200箇所が山崩れが発生した。これにより、大量の土砂や樹木が下流域に流出し、下流の橋を閉塞・倒壊させ、さらに破堤を引き起こし、未曾有の大災害となった。この狩野川台風の大災害から50年が過ぎ、被災経験者の高齢化とともに災害の記憶が忘れ去られつつあることから、50年目の節目として、狩野川台風における被害の全貌や大災害になった要因について、過去の資料を整理し、当時の貴重な体験談や写真・資料の提供などの協力をもとに分析・検証を行った。



写真—1 壊滅的な被害を受けた熊坂地区（昭和33年撮影）

2. 狩野川台風の特徴

昭和33年9月21日にグアム島の東海上で発生した台風22号は、勢力を強めながら北上、9月26日から27日にかけて、伊豆半島南端をかすめ、関東地方東部を縦断して三陸沖に抜け、その通過の前後に局地的な豪雨をもたらした。伊豆半島、東京を中心に大きな被害を与えた。台風が伊豆半島付近を通過した9月26日、狩野川上流の湯ヶ島観測所（旧建設省）では、当時の狩野川流域における観測史上最大日雨量483mmを大きく上回る日雨量728mmを記録、また、最大時間雨量は120mm（21時～22時）を観測した。狩野川台風の特徴としては、被害を受けた地域が狩野川上流域を中心とした狭い範囲に集中しており、強雨域が長時間にわたって天城山系付近からほとんど動かず、狩野川の上流に大量の強い雨をもたらした。



図—1

3. 大災害となった要因

①山林の荒廃と土石流の発生

当時の山々は、戦争中の燃料としての薪や戦後の復興のため、山から大量に木が切り出され、狩野川上流域の山林の約3割は、伐採跡地や植林されたばかりの稚樹に占められていた。このため、脆弱な火山噴出物からなる地質は、侵食され各地で土石流が発生した。

②土石流・流木による修善寺橋の閉塞及び決壊

土石や流木などを含んだ洪水は、狩野川と支川大見川の合流点下流の修善寺橋を閉塞させた。修善寺橋は、当時ではまだ数少ない強固な鉄橋であったため、閉塞後も倒壊せず、上流に約220万m³（25mプールでおよ



写真—2 伐場の大崩壊（昭和33年撮影）

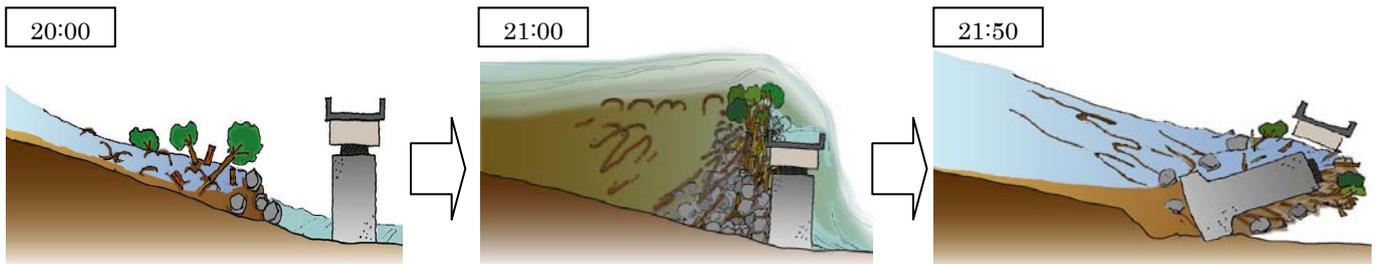
そ4,500杯分に相当)もの水を湛水させた。しかし、ついには水圧に耐えきれず、修善寺橋は倒壊し、大規模な洪水となって、下流の地区に大被害を及ぼした。

修善寺橋の決壊は左岸側から先に始まったという当時の証言から、左岸側の1スパン(約30m幅)が決壊したとして試算したところ、洪水のエネルギーは、4800万J(ジュール)と推定された。これは、荷物を満載した10tダンプ10台が、時速80km/hで激突したほどのエネルギーに匹敵する。

21時50分頃、修善寺橋の倒壊とともに一気に流れ出した洪水は、凄まじい勢いで下流の地域を襲い、直撃を受けた熊坂地区は、地区住民の約3割にあたる78世帯289名が亡くなるという、壊滅的な被害を受けた。熊坂地区を飲み込んだ濁流は、強い勢力を保ったまま、蛇行する狩野川の堤防を破壊しながら、直線的に流れ下り、多くの人家を押し流した。その後、千歳橋を閉塞させたが、倒壊せずに上流の南条地区の堤防を破堤させ、田方平野を濁水の海と化し、最終的に、死者・行方不明者853名、家屋の全壊・流出・半壊8,219戸という、甚大な被害をもたらした。

③住民の防災意識

狩野川流域では、以前にも、たびたび洪水による浸水被害はあったものの、人的被害をもたらすような災害はなかったため、狩野川台風襲来時も避難する必要がないと、大半の住民が思っていたことも、被害が拡大した要因と考えられる。



図一-3 修善寺橋の決壊に至るまで

4. 狩野川台風の教訓と課題

狩野川台風の時、修善寺橋下流のほとんどの家々が流されるなか、中島地区では部分的に家屋の流出を免れている。この地区は、「中島」という名前のとおり、周辺よりも1~2m程度地盤が高く、明治時代から、たびたび氾濫する狩野川から、身を守るため、この場所に人々が住むようになったと考えられる。さらに、この地区では、家の周りに屋敷林をつくり、洪水の直撃によって家屋に大きな被害が及ばないように工夫されており、避難所として利用されている浮島神社も、屋敷林と同様に神社を囲む鎮守の森によって大きな被害を免れている。

狩野川台風後、砂防事業や河川事業などにより、水害・土砂災害による安全度は飛躍的に向上している一方、水害から身を守る先人の知恵などが伝承されていない実態もあり、住民の防災意識は低下しつつある。狩野川台風のような、悲惨な災害を二度と起こさないためにも、砂防・河川事業といったハード整備に加え、防災教育や防災訓練の実施など、防災意識を向上させる取り組みが重要と考える。

